情報システム学会の利用方法－会員も学会も Win-Win

神奈川県庁　岩崎　和隆

１　はじめに

当学会のある打合せで、多くの方に新規入会していただいているが、学会の利用方法が分からない人がいるのではないか、学会の利用方法について説明した方がよいのではないか、という意見が大勢を占めました。

そこで、私がその説明を引受けました。理由は、学会のヘビーユーザであると自覚しているからです。以下では、学会の利用方法を説明します。なお、本稿は当学会理事会の見解でなく、一利用者として私が感じていること、認識していることを説明いたします。

２　学会から会員への連絡

基本的に電子メールです。様々なイベントの案内も、メールで届きます。

それから、学会ページに様々なお知らせが出ています。

【学会ページ】

https://www.issj.net/

学会からのメールには、年 12 回、毎月月末（12 月月末はなしで、1 月 1 日）に配信している学会メルマガと随時配信しているイベントのご案内等があります。学会メルマガが届いていないときは、随時配信のメールも届いていない可能性があります。学会事務局に相談しましょう。

３　会員から学会事務局への連絡

次のアドレスにメールを送ります。

issj-office■issj.net　（■を@に置き換えてください。）

なお、後で説明するメルマガ投稿は「issj-magazine■issj.net」へ、学会誌への投稿は「issj-journal■issj.net」へ送ります。いずれも■を@に置き換えてください。

事務局には電話がありますが、事務局員がオフィスに常駐していないので、メールで連絡した方が確実です。

４　聴く

すべて、非会員にも公開されていますが、会員は参加費が無料ないし非会員より安価な参加費で参加できます。

（１）全国大会・研究発表大会

例年、11 月下旬ないし 12 月上旬に実施。

形式は、他の学会でもよくある普通の全国大会・研究発表大会です。しかし、中身は特徴があります。情報システム学会では情報システム≠コンピュータ・システムです。情報システムは、コンピュータ・システムよりもはるかに定義が広いので、内容も多様なものとなります。

基調講演や一般公募の口頭発表、ポスター発表などを聴講できます。

参加費が必要です。

（２）シンポジウム

例年、5 月下旬に開催。会員は無料です。

（３）講演会

例年、春と秋に開催。参加費が必要です。

（４）研究会

当学会には、いくつか研究会があります。

会員、非会員ともに参加無料です。

（５）懇話会

当学会でユニークなものではないでしょうか。現在の懇話会は、産業界と大学とが協働して人間中心の情報システムを探求し、次の世代に継承していくことを見据えて、「オープン」と「若返り」をキーワードに進めていくことになっています。

会員、非会員ともに参加無料です。

５　読む

（１）メルマガ

年 12 回配信。毎月下旬配信ですが、12 月は配信しないで、1 月 1 日に配信します。そのため、1 月は 1 日と下旬の 2 回になります。

イベントの周知や会員への事務連絡にとどまらず、連載記事があるのが大きな特徴です。現在、連載記事は 3 本です。蒼海憲治さんの「プロマネの現場から」、三村和子さんの「″Well-being″ことはじめ」を私はいつも楽しみにしています。私自身も「発注者からみた官公庁情報システムの現状と課題」を連載しています。

（２）学会誌

形式は、他の学会でもよくある普通の学会誌です。年 2 回、9 月末と 3 月末に発刊しています。

６　発表する

発表する、というと、ハードルが高いように感じるかもしれません。

しかし、現在研究や実務ですばらしい業績を残している方でも、最初からその分野の第一人者であった訳ではありません。そのため、全国大会・研究発表大会とメルマガについては、平均的な他の方より少し詳しいくらいであっても積極的に発表することをお勧めします。

発表にお金がかかる学会がありますが、当学会はすべて無料です。なお、全国大会・研究発表大会は、参加費が必要ですが、聴講のみのときと参加費は同じです。(参加費に発表料が加算されることはありません。)

（１）全国大会・研究発表大会　一般公募口頭発表及びポスター発表

ア　発表資格

会員でないと発表できません。

発表申込と同時に入会申込をすることは可能です。なお、入会審査があります。

イ　発表内容の審査

採否の審査がありますが、私自身は、NG になったことはありません。

ウ　発表予稿論文の投稿

期日までに所定のページ数の発表予稿論文を作成して投稿する必要があります。

エ　1 回の全国大会・研究発表大会で発表できる件数

発表件数 1 件という制約がある学会がありますが、当学会では制約がありません。なお、ポスター発表を 2 件以上行うのは、物理的に不可能です。

口頭発表を 2 件以上行うときは、プログラム編成の都合上、制約がかかるときがあります。プログラム編成上の制約をクリアできれば、がんばって 3 件発表することも可能かもしれません（私は、過去 3 回、3 件発表をやりました。）

（２）メルマガ

ア　寄稿資格

会員及び会員の紹介があった非会員です。非会員の寄稿ではメルマガ編集委員会の審査があります。

イ　寄稿したいとき

（ア）会員

毎月 20 日までに、メルマガ編集委員会（issj-magazine■issj.net(■を@に置き換えてください。)）に原稿をご提出ください。

なお、連載記事執筆者用のメルマガ原稿ひな形がありますので、原稿作成前にメルマガ編集委員会にひな形の提供を依頼することをお勧めします。

（イ）非会員

メルマガ編集委員会の審査があるので、毎月 20 日でなく早めにメルマガひな形を入手し、早めに原稿を提出した方がよいです。もっとも、間に合わなくても審査に通れば次号

に掲載されます。

ウ　連載と単発

　メルマガ寄稿は、連載と単発が選べます。なお、連載でも、毎月 20 日までに事務局へ今月は休載すると連絡すれば休載にできます。そのため、連載では、あえて、自分自身に毎月執筆というハードルを課すか、難しいときは無理せず休載するかを選べます。健康を害してまでやることはないので、そういうときは休載することをお勧めします。

エ　特にメルマガ寄稿をお願いしたい方

　メルマガ寄稿にテーマに制約はありませんが、情報システム関係の書籍を出版された方は、ぜひ、著書紹介をご寄稿ください。

（３）学会誌

ア　投稿資格

　会員でないと投稿できません。

イ　掲載日

　投稿日に応じて、9 月末日ないし 3 月末日発刊の学会誌に掲載されます。

　査読付き論文は、審査に時間がかかります。

ウ　詳細

　学会誌への投稿については、次のページを熟読してください。

　　https://www.issj.net/thesis/index.html

（４）発表方法の比較

　それぞれの発表方法のメリット、デメリットは次の表 1 のとおりです。

表１　発表方法の比較

項番	発表方法	特徴
1	全国大会・研究発表大会	・発表予稿論文にページ数の制約がある ・1 年以上のタイムラグはあるが、発表予稿論文が J-SATGE に掲載される ・J-SATGE に掲載されるので、研究機関に所属していなくても、researchmap のページ（注 1）を開設できるのではないか（詳細は、researchmap の運営者に要確認） ・Google の検索では、J-SATGE に掲載されるので優遇されていると感じる ・発表時に質疑応答ができるので、フィードバックが得やすい ・発表機会は、年 1 回（11 月下旬ないし 12 月上旬）
2	メルマガ	・毎月寄稿の機会がある ・ページ数について、上限、下限ともに制約がない（私自身は、大きなテーマを扱い 17 ページになったことがある） ・Google の検索では、学会なので優遇されているように感じる ・毎月連載すれば、勉強や研究が捗る ・読者から感想をいただくことは少ない。そのため、内容へのフィードバックが得づらい ・J-SATGE には掲載されない
3	学会誌	・J-SATGE に掲載されるので、研究機関に所属していなくても、researchmap のページ（注 1）を開設できるのではないか（詳細は、researchmap の運営者に要確認） ・Google の検索では、J-SATGE に掲載されるので優遇されるのではないか ・読者からのフィードバックを得づらい ・発表機会は、年 2 回

注１　国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が運営するデータベース型研究者総覧。自らの研究実績をまとめておくことができます。開設にあたり、JST への申請が必要なときがあります。

（６）「発表する」共通のメリット

私は、故芳賀正憲さんから「書けば考えがまとまる」と言う言葉でメルマガ連載を説得

されました。そのときは半信半疑で、断り切れずに連載をすることにしたのですが、1 年くらいで「書けば考えがまとまる」を実感できるようになりました。また、あくまで自己評価ですが、研究の進捗が加速したと感じています。

また、これも自己評価ですが、研究を始めた 2012 年当時、今から省みると当該研究分野の平均レベルに達しているかすら、あやしい状況でした。そのようなレベルでしたが、大学等で指導を受ける機会がないにもかかわらず、学会での様々な発表を通して成長したと実感しています。

７　研究会を作る

特定のテーマを有志で研究する研究会を設立することができます。

８　会員が学会を利用すればするほど、学会が発展する Win-Win になる

会員が学会を利用すればするほど、学会として研究などの成果を挙げることができます。したがって、会員が学会を利用すれば、会員も学会も Win-Win になります。

９　おわりに

（１）お断りとお願い

本稿の内容は、情報システム学会理事会の見解でなく、私の意見です。（もちろん、神奈川県の見解でもありません。）

（２）私への連絡方法

学会の利用方法についてのご質問は、学会常務理事としてでなく、個人的に承ります。私の連絡先をご存じの方はその方法で、ご存じない方は次の方法で連絡可能です。

researchmap の Web サイトで私を検索してください。私のページの「ホーム」タブ（最初に表示されるページ）に私への連絡方法を掲載しています。